いろは歌

いろはにほへと ちりぬるを イロハニホヘト チリヌルヲ わかよたれそ つねならむ ワカヨタレソ ツネナラム うるのおくやま けふこえて ウヰノオクヤマ ケフコエテ あさきゆめみし ゑひもせす アサキユメミシ ヱヒモセス

色は(葉)匂へど 散りぬるを

我が世誰ぞ(<u>得</u>) 常ならむ ア行の「え」 有為の奥山 今日越<u>え</u>て ヤ行の「え」

浅き夢見し(じ) 酔ひもせず

cf.『涅槃経』偈

諸行無常 是生滅法 生滅滅已 寂滅為楽

・咎無くて死す cf.『仮名手本忠臣蔵』赤穂四十七士

いろはにほへと cf.大東急記念文庫蔵 承暦三(1079)年抄 ちりぬるをわか 『金光明最勝王経音義』所収 以呂波 よたれそつねな らむうゐのおく やまけふこえて あさきゆめみし

五十音図

ゑひもせす

あいうえお かきくけこ さしすせそ たちつてと なにぬねの はひふへほ まみむめも やいゆえよ らりるれろ わゐうゑを ん

アイウエオ カキクケコ サシスセソ タチツテト ナニヌネノ ハヒフへホ マミムメモ ヤイユエヨ ラリルレロ ワヰウヱヲ ン

いろはカルタ

いろは仮名四十七字に「京」を加えた四十八字のそれぞれを首字にしたことわざを表わした、主に子供向けの、カルタ。

ことわざの内容を絵と字で表わした札を一対とする。

江戸時代後期寛政(1789~1801)前後に上方で始まり、続いて江戸で作られた。

上方系いろはカルタの代表的語句

- い 一寸先は闇 いやいや三杯
- る 論語読みの論語知らず
- は 針の穴から天覗く 八十の手習い
- に 二階から目薬 憎まれ子世にはばかる
- ほ 仏の顔も三度
- へ 下手の長談義
- と 豆腐に 鎹
- ち 地獄の沙汰も金次第
- り 綸言汗の如し
- ぬ 糠に釘
- る 類をもって集まる
- を 鬼も十八
- わ 笑う門には福来たる
- か 蛙の面に水 かわいい子には旅をさせ
- よ 夜目遠目傘のうち
- た 立て板に水
- れ 連木で腹切る
- そ 袖振り合うも他生の縁
- つ 月夜に釜を抜く
- ね 猫に小判
- な 済す時の閻魔顔
- ら 来年のことを言えば鬼が笑う
- む 馬の耳に風
- う 氏より育ち
- る 鰯の頭も信心から
- の 鑿と言えば槌
- お 負うた子に教えられ浅瀬を渡る
- く 臭い物に蝿がたかる 腐っても鯛
- や 闇に鉄砲
- ま 蒔かぬ種は生えぬ
- け 下駄と焼味噌 芸は身を助ける
- ふ 武士は食わねど高楊枝 梟 の宵企み
- こ これに懲りよ道才坊
- え 縁と月日
- て 寺から里へ
- あ 足元から鳥が立つ 商いは牛の涎
- さ 竿の先に鈴 猿も木から落ちる
- き 鬼神に横道なし 義理と褌
- ゆ 幽霊の浜風
- め 盲の垣覗き
- み 身は身で通る
- し 吝ん坊の柿の種』
- ゑ 縁の下の舞 栄耀に餅の皮
- ひ 瓢箪から駒 膝頭で江戸行き
- も 餅は餅屋
- せ 性は道によって賢し せんちで饅頭
- す 雀百まで踊り忘れず
- 京 京に田舎あり

江戸系いるはカルタ(犬棒カルタ)の語句

- い 犬も歩けば棒に当たる
- ろ 論より証拠
- は 花より団子
- に 憎まれっ子世にはばかる
- ほ 骨折り損のくたびれ儲け
- へ 屁をひって尻つぼめる
- と 年寄りの冷や水
- ち 塵積もって山となる
- リ 律儀者の子沢山
- ぬ 盗人の昼寝
- る 瑠璃も玻璃も照らせば光る
- を 老いては子に従え
- わ 割れ鍋に綴じ蓋
- か かったいの瘡うらみ
- よ 葦の髄から天井を見る
- た 旅は道連れ
- れ 良薬口に苦し
- そ 総領の甚六
- つ 月夜に釜を抜く
- ね 念には念を入れ
- な 泣く面を蜂が刺す
- ら 楽あれば苦あり
- む 無理が通れば道理引っ込む
- う 嘘から出た 真
- る 芋の煮えたもご存知ない
- の 喉元過ぎれば熱さ忘れる
- お 鬼に金棒
- く臭い物に蓋
- や 安物買いの銭失い
- ま 負けるが勝ち
- け 芸は身を助ける 喧嘩過ぎての棒乳切り
- ふ 文を遣るには書く手は持たぬ
- こ 子は三界の首枷
- え 得手に帆をあげる
- て 亭主の好きな赤烏帽子
- あ 頭隠して尻隠さず
- さ 三辺回って煙草にしょ
- き 聞いて極楽見て地獄
- ゆ 油断大敵 _ ,
- め 目の上の瘤
- み 身から出た錆
- し 知らぬが仏
- ゑ 縁は異なもの
- ひ 貧乏暇なし
- も 門前の小僧習わぬ経を読む
- せ 背に腹はかえられぬ
- す 粋が身を食う
- 京 京の夢大坂の夢